

みる つくる
かたる

2007

VOL.34
NO.2 (通巻96号)

ART NEWS 千葉県立美術館報

企画展「種谷扇舟 一書の源を探究し、新しい書の創造へ」
平成19年11月24日(土)～平成20年1月14日(月)

書家、種谷扇舟の軌跡

種谷扇舟を語る時、3つの活動をキーワードとすることができます。1つめは本県で多くの教え子を育成し書の世界に導いた教育者であり、2つめは中国の古典の書の研究者であり、3つめは近代詩文書の可能性を追求した書家です。

この3点を踏まえながら、種谷扇舟の足跡を辿ります。

一書との出会い

種谷は大正3年、八街市に生まれます。書を意識したきっかけは、小学校3年生の時に先生の勧めで席書会に出場したことでした。それまで書を習ったことはありませんでした。

昭和4年、千葉師範学校入学時に、新任教師として赴任した浅見喜舟氏との出会いは、種谷の将来を決定付けるものでした。喜舟氏の指導で、書の学び方を知り、尾上柴舟、豊道春海ら書家たちを紹介され、競書雑誌への投稿や書道展への出品、それらの活動を通じて知り合った人々との書の交換等によって自己研鑽を重ねていきます。扇舟の名は、喜舟氏の教えにより、那須与一の「扇」を狙う心境と喜舟氏の舟の字から名付けられました。

一教育者として

昭和9年、新任教師として八街市の実住小学校を皮切りに小学校12年、中学校8年、昭和27年に喜舟氏の勧めで千葉一高(現千葉県立千葉高等学校)で17年、大学20年、老人学校等の社会教育5年の長きに亘り、教鞭をとります。

種谷は、書の学習方法として、手本はめったに書かず、中国の古典から直接学ぶことを勧め、中国や日本の碑文を写し取った拓本をもとに指導しました。手本は書いた人の解釈や好みが入るので、中国の古典の本物を見たり、本物から直接学ぶことがおろそかになることを恐れたのです。

しかし、種谷の研究室には書に関する貴重な書物や道具がいつも山積みされ、生徒は見る事も借りる事も許されました。また秘蔵の筆、墨、紙であっても制作に必要であれば惜しみなく生徒に使用させました。その長年の教え子達を中心に昭和27年に「白扇書道会」が結成されます。

一中国の古典を求めて

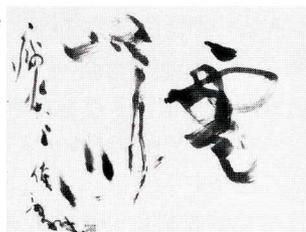
中国の古典の書の多くは碑文として石に刻まれて残されています。それらは拓本として写し取られ、臨書として書を学ぶ人たちの手本となってきました。その中でも、種谷を魅了したのは摩崖碑でした。

摩崖碑とは、書家が断崖など場所を選び、朱墨で書を書き記した作品を刻師が彫ったものです。その場所を囲む山や樹木などの雰囲気はもとより、選んだ岩の位置、岩肌、岩の欠損

部分なども作品に生かして完成されています。古典に直接学ぶことの重要性を説いていた種谷にとって、古典の実物の書がどのような場所に息づいて、それを取り囲む自然と調和しているのかを知ることは重要でした。

昭和40年から80回を超える中国歴訪を重ねます。なかでも北魏の書家、鄭道昭(ていどうしょう)が山東省に残した摩崖碑に魅せられ、天柱山、雲峰山、太基山などの山々を探訪し、収集した拓本は数万点を超えました。同じ書家の作品でも樹木に囲まれた山と、岩ばかりの山など場所柄により表現は異なります。また、種谷は中国の碑文を探究する旅を通して日中の友好関係の架け橋にもなりました。

大きく奔放に描かれた「雲峰山」とそれに寄り添うような「疲れたよ俺」。この作品「雲峰山 疲れたよ俺」からは、鄭道昭が好んだ山、雲峰山に登り、目的を達した充実感と鄭道昭に寄せる思慕が感じられます。



《雲峰山 疲れたよ俺》2004

一近代詩文書の研究と普及

甲骨文字や、青銅器の銘文等に端を発する漢文は中国で誕生し、やがて日本に伝来し、仮名が生み出されました。これら古典の書はその時代の言葉で書かれ、その時代を反映するものでした。書の分野は戦前までこの伝統的な漢字、仮名、篆刻で形成されていました。戦後、現代には現代の文体の方が感情移入しやすく、また多くの人の理解や共感を呼ぶのではないかと、漢字とかなが交じった近現代の詩歌や俳句、或いは自作の詩などを素材にする運動が書家の金子鷗亭、飯島春敬、日比野五鳳らにより提唱されます。この漢字と仮名が交じった現代文はそれぞれの思想と主張により「新調和体」「近代詩文書」「漢字仮名交じり文」「新和様」等の名称で呼ばれました。種谷も漢字から出発した書家でしたが、技法が目されがちであった書の世界に心を吹き込もうと近代詩文書に取り組みました。

本館で開催している「日本童謡の書」展は種谷の主宰により今年で19回を重ねる全国規模の公募展です。日本人に馴染み深い童謡を題材として自分の解釈で書に表現しようという近代詩文書の精神を反映した興味深い試みです。童謡の持つリズムや旋律の表現方法は、文字の配置、大きさ、勢い、墨色など、書き手の解釈により異なります。

この作品「山のお寺の鐘がなる」は「雲峰山 疲れたよ俺」とともに種谷の絶筆のひとつとなりました。この作を種谷は思わず口ずさみながら制作したそうです。リズムを刻むように散らされた軽やかな文字には、童心に返るような思いが感じられます。



《山のお寺の鐘がなる》2004

本展では自作の詩をはじめ、童謡、武者小路実篤の詩や石原八束の俳句などを題材にした作品、中国の古典を臨書した作品など、書家種谷の足跡の集大成となる約40点の作品を展示し、その軌跡を辿ります。(学芸課 相川順子)

11月以降の行事案内

ミュージアムコンサート

歌とピアノ三重奏による「秋の名曲集」

企画展「種谷扇舟」関連事業として、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉による、ミュージアムコンサートを開催します。歌とピアノ三重奏による「秋の名曲集」として、ドヴォルザークの〈家路（新世界交響曲より）〉やヴィヴァルディの〈秋（ヴァイオリン協奏曲集「四季」より）〉、〈もみじ〉や〈まっかな秋〉など日本の秋の童謡、さだまさしの〈秋桜（コスモス）〉などの曲を演奏します。



開催日時 平成19年11月24日(土) 14:00~15:30
会場 千葉県立美術館 講堂

「アート・コレクション展」

アート・コレクションでは、ほぼ年間を通して展示する「浅井忠・フォンタネージとバルビゾン派」とともに、コーナー展示とテーマ展示を行います。11月以降のコーナー展示では、「板倉鼎・大野隆徳・柳敬助」「日本画の花」「コレクション50」などの各テーマに沿った小さな展覧会によって収蔵品を紹介しします。またテーマ展示では、「池田満寿夫の世界」・「工芸・わざと美」「こどものための展覧会－篠崎輝夫とシルクロード－」など、材質やジャンルなど多岐に渡った作品を紹介しします。

アート・コレクション「主展示」

「浅井忠・フォンタネージとバルビゾン派」 【第2展示室】

11月24日(土)～平成20年3月30日(日)
浅井忠を中心に、師のフォンタネージの作品や、ミレー、コロー、ディアズなどのバルビゾン派、さらにフォンタネージとバルビゾン派を結びつけたラヴィエの作品を紹介しします。



フォンタネージ《池と樹木》

アート・コレクション「コーナー展示」

「板倉鼎・大野隆徳・柳敬助」 【第1展示室】



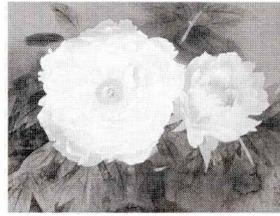
11月24日(土)～平成20年1月27日(日)
旧制千葉中学校（現県立千葉高等学校）で、堀江正章に学んだ三人の洋画家を紹介しします。

大野隆徳《不忍池の初夏》

「日本画の花」

【第1展示室】

11月24日(土)～平成20年1月27日(日)



松尾敏男《晨光富貴》



富取風堂《花籠》

富取風堂、吉田登毅、松尾敏男、渡辺阿以湖などの作家の日本画で描かれた花々をご覧いただけます。

アート・セレクション「コレクション50より」

【第1展示室】

平成20年1月29日(火)～4月13日(日)



信田洋《透壺》 ルノワール《少女像》

県立美術館収蔵作品50選より、洋画、日本画、工芸の作品を展示しします。

アート・コレクション「テーマ展示」

「こどものための展覧会－篠崎輝夫とシルクロード－」

11月24日(土)～平成20年1月20日(日)

【第3展示室】



《敦煌莫高窟千仏洞》



《妥梅英さん》

シルクロードの風景やそこで暮らす人々などの風俗を描いた篠崎の水彩画を紹介しします。

「池田満寿夫の世界」

【第3展示室】

平成20年1月26日(土)～4月6日(日)



《ウエルカムB》

芸術や文学、映画などのさまざまな世界で才能を発揮した池田満寿夫の本来の活動であった版画を紹介しします。

「工芸・わざと美」

【第8展示室】

平成20年1月19日(土)～4月20日(日)



工芸のさまざまなジャンルでの優れたわざとその美を紹介しします。

秋山逸生《菱華文象嵌長手箱》

「ユトリロ展」関連行事の報告

「ユトリロ展－モンマルトルの詩情－」は、1万5千人以上の方々に鑑賞していただき、好評の内に終了しました。展覧会と共に行われた関連事業の様子を紹介します。

美術講演会

「ユトリロの魅力－モンマルトルとパリの情景－」

7月21日(土) 美術館講堂 参加者190名

ブリヂストン美術館館長の島田紀夫氏による講演が行われました。スライドを多用して、現在のモンマルトルの風景なども交えて、ユトリロが創作を行った環境などから、彼の芸術を解説していただきました。

ユトリロ展関連ワークショップ「ユトリロであーと」

8月11日(土)・12日(日) 美術館第6展示室 参加者52名

「ユトリロのまちにまよいこんだら……」をテーマにした創作体験を、実施しました。夏休みの宿題に……と期待された本事業の参加者は、小・中学生両日合わせて52名。そのうち、普段ワークショップに足が遠いとされる中学生5名の参加が、企画者には非常に喜ばしいことでした。

今回のユトリロ展に関連したワークショップを立ち上げるにあたって、建物や街路をモチーフにしたユトリロの作品の中に入った自分を想像することから、この企画がスタートしました。ユトリロの作品からインスピレーションを得て、形にしたい想いは徐々にふくらみ「画家のユトリロに出会ったら、自分はどんなポーズをとってしまうのだろう」というところに辿り着きました。「まよいこんだら、」というのは、ユトリロがまさに描かんとする街や建物に、“わたし”が存在したら、ということと、さらにユトリロが街や建物にいる“わたし”を発見し、作品に登場させてくれるかもしれないと期待を込めた言葉でした。



実際の創作の場では、ユトリロ作品を鑑賞後、参加者めいめいがユトリロに出会ったときのポーズで写真に収まることから具体化していきま

した。「白の時代」といわれるユトリロ作品のうちの8点から抽出した60余色のシールと段ボール紙、自分の写真を素材に、ユトリロの描いた建物や街をモチーフにした作品を作るのが創作の課題。白の微妙な差をもったユトリロ色シールは、参加者に改めてユトリロの使った微妙な色の多さを呈し、自分の作品の中にユトリロの色を再構築する機会となりました。

今回のワークショップを実施するために、当日参加の6名のサポーターをはじめ多数の人員が関わってくれました。シール裁断の一部は職場体験中学生に協力を仰ぎ、会場作り・運営、特に写真撮影や写真のコンピュータ処理等々には、9名の博物館実習生の力が多大な応援となるなど、さまざまな分野の人員のコラボレーションで事業を成し得ることができました。

最後に、作品を手会場を後にした参加者が、満面の笑みをたたえていたことは言うまでもありません。

平成19年度前期の普及事業を振り返って

今年度も芸術をより深く、多方面から理解するために、色々な創作体験を行うワークショップが行われました。

「ビッグ・ペイントあーと」

5月12日(土) 美術館芝生広場 参加者369名

美術館の壁や芝生広場に置かれた大きな紙に、思い思いの絵を描く「ビッグペイントあーと」も5月の恒例行事となりました。まず12畳の紙に「光」と書く「大書」から始まり、壁と芝生に置いた紙が、絵でうめられていきました。芝生には、ワゴン車を2台用意し、何人もが手形を押すことで模様を作りました。

「県民の日エンジョイあーと」

6月16日(土) 県立美術館 参加者100名

「県民の日」から3連休の中日となる土曜日に、3つの創作体験ができるワークショップが行われました。1人が3種類の創作体験を純に行うわけですから、なかなか大変ですが、完成したときの喜びは大きく、充実した時間が過ごせたようでした。

「もようで・カンバッチあーと」

紙にカンバッチの図案を描き、台金具にのせてプレスすると、カンバッチが完成します。

「ぬってけずって・あーと」

アクリル板に色を塗り、削った部分に他の色を塗ったり、色紙を貼ったりして作品に仕上げます。作品を額に入れて完成です。

「かたがみもようで・あーと」

好きな模様の型紙を選び、紙にのせて、上から絵の具を付けた刷毛で色を差して仕上げました。

「モノレールはりっ子あーと」

7月7日(土) 千葉都市モノレール千葉駅 参加者78名

今回の「はりっ子あーと」のテーマは「ユトリロ展」にちなんで「建物や街」をテーマに創作体験を行いました。

千葉都市モノレール連絡通路の壁に貼られた白紙に、カラーシートを切って貼り、建物や街を形作っていきました。作品は、1ヶ月程度貼っておき、乗降客の目を楽しませました。

「博物館実習」が行われました

「学芸員」という資格をご存じでしょうか。美術館や博物館に勤務する場合、必要とされる資格ですが、これを取得するには美術館や博物館での実習が必要です。今年も県立美術館では、8月8日から14日まで（1日は自宅研修日）の期間、9大学9名の学生が博物館実習を受講しました。

授業で学んだ事柄と実際の現場との違いに戸惑いを覚えたり、美術館の裏側をいろいろ体験できたりと濃密な日々を過ごしたようでした。ワークショップの運営を通して普及活動に関わったことが印象深い、目に見えない地道な作業の多さや細かな部分への配慮の必要性に驚いた、美術館のスタッフのように扱って欲しかった等に加え、全学生が貴重な体験をしたという感想をもって実習を終えました。

今年は例年にない猛暑の中の実習でしたが、私達現場の職員の対応と学生たちの奮闘ぶりは暑さを忘れてしまうほどでした。



これから行われるワークショップ・実技講座のご案内

ワークショップ

本年度は以下の2つのワークショップが予定されています。

◆「シルクロードであーと体験」

1月12日(土) 参加費-500円

「こどものための展覧会—篠崎輝夫とシルクロード—」を鑑賞した後、シルクロードのイメージを、砂を使って表現します。土台にするのは、自分の形を段ボールにうつして切り取ったもの。そこに、色砂やカラーシートなどで模様をつけていきます。完成したら、並んで記念撮影をします。

<申込締切12/20(木)必着>

◆「スタンピングあーと」 2月9日(土) 参加費-500円

版画家池田満寿夫の展示にちなみ、版を使った創作体験を行います。丸い筒で思い思いの版を作り、みんなで転がして作品を完成させます。自分の作品と他の人の作品を重ね合わせたりせめぎ合ったり・・・、大きな紙いっぱいにはころころアートが出現します。

<申込締切1/31(木)必着>

※各日も受付は12:30から、体験は13:00からです。参加希望の方は、往復はがきに希望ワークショップ名・住所・氏名・電話番号・学校・学年を明記入の上、〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1 千葉県立美術館 普及課までお申し込みください。締め切り日必着です。希望者多数の場合は、抽選とさせていただきます。

実技講座

●金工講座

<内容>銅板レリーフと彫金の作品製作を通して、各種工具の取り扱い方と金属工芸の具体的な技法を身につけます。

<日程>1月17日(木)、18日(金)、22日(火)、23日(水)、24日(木)、25日(金)、29日(火)、30日(水)、31日(木)、2月1日(金)

<定員>18名 <講師>小林正利先生

<費用>14,000円 <申込締切>12月20日(木) 必着

●篆刻講座

<内容>篆刻の魅力を堪能し、基本的な技法や用具の取り扱い方を習得します。

<日程>2月12日(火)、15日(金)、19日(火)、22日(金)、26日(火)、29日(金)

<定員>20名 <講師>那須大卿先生

<費用>10,000円 <申込締切>1月17日(木) 必着

※参加希望の方は、往復はがきに希望講座名・住所・氏名・電話番号を明記の上、〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1 千葉県立美術館 普及課までお申し込みください。希望者多数の場合は、抽選とさせていただきます。

利用案内

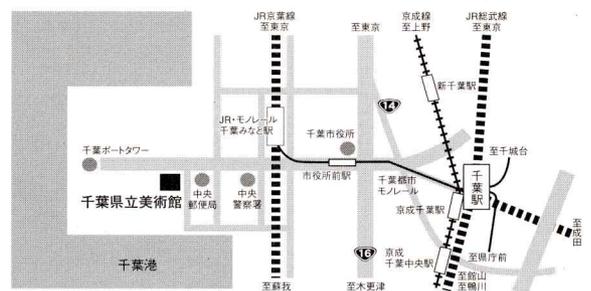
開館時間 午前9時～午後4時30分

入場料 常設展 一般 300円 高校・大学生 150円

企画展「種谷扇展」 一般 500円 高校・大学生 250円

小中学生・65歳以上・障害者手帳保持者の方（介護者含む）は無料です。お得な「パスポート」もごございます。詳しくは、お問い合わせください。

交通



JR京葉線・千葉都市モノレール 「千葉みなと駅」下車徒歩8分

JR総武線 「千葉駅」下車東口12番バスのりばから「千葉ポートタワー」行「県立美術館・中央郵便局」下車徒歩1分

<東京方面から> 東関東自動車道「湾岸習志野」I.C.から約20分

<成田方面から> 東関東自動車道「千葉北」I.C.から約25分

〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1

電話 043-242-8311

<http://www.chiba-muse.or.jp/ART/>

千葉県立美術館報「みるかたるつくる」VOL34-2(通巻96号)

2007年11月15日発行